故郷の声 下

菊池敬一

著者紹介

菊池敬一（きくちけいいち）一九二〇年岩手県に生まれる。岩手師範学校を卒業し教員となる。著書に「あの人は帰ってこなかった」「かっぱの目は星の色」「北天の星よ輝け」など。丸木俊氏との共同の仕事に「おしらさま」「きつねのおきてがみ」「八郎太郎」などがある。
現住所／岩手県和賀郡和賀町横川目一五

丸木　俊（まるきとし）一九一二年北海道に生まれる。女子美術専門学校卒業。一九五〇年以来、丸木位里氏と共に「原爆の国」を発表。一九五二年国際平和文化賞を受賞。著書に「ひろしまのピカ」「幽霊」「女絵かきの誕生」などがある。
現住所／埼玉県東松山市下唐子一四〇一

NDC 913　　Printed in Japan

故郷の声〈下〉

一九八一年一一月二五日　第一刷

著　者　菊池敬一
発行者　小峰広恵
発行所　株式会社小峰書店
東京都新宿区舟町五
電話／(代)〇三(三五七)三五二一
振替／東京六一一九五四

組版／国際文化交易株式会社／本文印刷／株式会社厚徳社／表紙印刷／斎藤印刷所　製本／小高製本工業株式会社

落丁・乱丁本はおとりかえします
定価はカバーに表示してあります

©1981　菊池敬一・丸木俊

ISBN 4-338-06716-2349

故郷の声〈下〉

菊池敬一

小峰書店

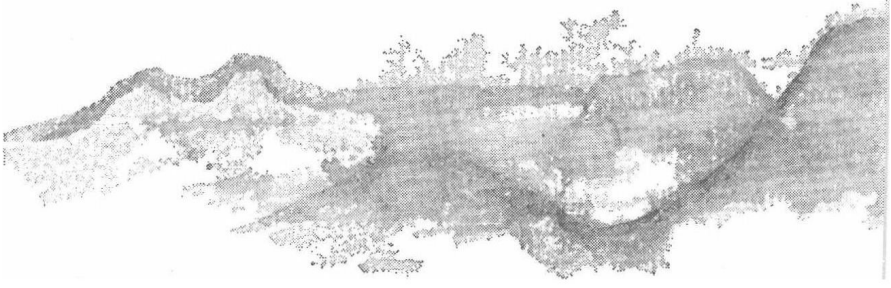
故郷の声〈下〉　もくじ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

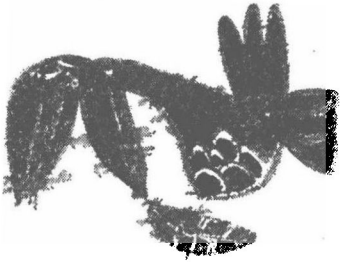
武装解除……9
行く雁……33
セメント袋のシャツ……50
冷凍貨車の中……68
捕虜病棟……89
蜃気楼……107
私刑……123
感電……137
農民兵……157

ソ連の母……169
のら犬……184
民衆裁判（みんしゅうさいばん）……205
体温計……224
帰国命令……245
赤いはっぱの手紙……258
あとがき……275

装幀・さし絵／丸木俊



故郷の声〈下〉



武装解除

大安屯の山に五百名ほどの兵隊が集まっていた。

思いがけないことに、柞木南屯で散りぢりになった早川兵長たち三十名ほどがいた。七中隊の兵隊も八十名以上もいた。全滅したと思われた九中隊の生き残りの兵隊三十名もいると聞いたとき、みんなは思わず口をつぐんだ。ほかは知らない所属の兵隊ばかりだった。

ふしぎなことに知らない所属の兵隊たちは、みな新しい汚れない服装をして所持品も整っていた。一目見て戦闘をしていないことがわかる。その兵隊たちは、健太郎たちをいぶかるような目つきで見ては近づかなかった。山崎という大佐がいて、この山陣地の総指揮をとっているということだった。

健太郎たちは先に来ていた八中隊の仲間といっしょになって、六十名ほどで崖の上

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

に場所をとった。

みんなで一晩、草でかこった屋根の下で今までのことを話しあった。

「金沢上等兵は、柞木南屯で敵陣に飛びこんだぞ」

「奥山の軍隊手帳を拾ったが、きっと奴も戦死したべ」

「大場は自殺した。手榴弾で。前から少し変だった」

「熊谷伍長は、きっとあれは後からだれかに撃たれたぞ。ずいぶん兵隊をなぐったからな。狩原なんかは、いつか今に見てろ、弾は前からばかりはこねぇだぞと、にくんでいたからな」

「九中隊の連中はよ。あの五二四高地のことどこから聞いたか知っているようだぞ。八中隊は人殺し中隊だといっていたそうだぞ」

「山の中で裴徳の野戦重砲隊が全滅したあとを見たが、死体がごろごろころがって腐っていて、地獄そのままだった」

話はつきない。驚いたのは、

「なんでも日本がソ連と停戦協定を結んだというビラがずいぶんそちこちにはってあ

ったそうだ」

と、いう話題だった。しかし、この話題は敵のデマだとだれも信用しなかった。

この山をみんなは「赤城の山」と呼んでいた。うらぶれた敗残兵の集まりにぴったりの名前だと健太郎は思った。伊藤正平一等兵は、右から左へ肩を敵弾に貫通されて、その傷口が化膿してそこから尾の生えた蛆が出入りしているという。すわったまま動けないので「地蔵様」という渾名をつけて、みんなでひとにぎりずつトウモロコシを口に入れておがむという。話した兵隊は笑って話したが、健太郎たちには笑えなかった。糧秣を山崎大佐の部隊がたんまりもっているのだが、二日前から、もうなくなったといって分けてくれなくなったという。しかたなく、みんなで交代で山からおりて畑のトウモロコシを取ってきて、それを少しずつためて今ではたいてい背嚢いっぱい持っているという。

健太郎はトウモロコシを持って伊藤正平一等兵のいる草小屋へ行った。

伊藤は頭にたれさがった草をかぶったまま、路傍の石地蔵みたいにすわっていた。入隊前は秋田県の十文字町で洋服屋をしていたという伊藤は、色白の丸顔だったが、

目が落ちくぼんで死人を思わせる顔に変わっていた。
「たいへんだったな。よく助かったな」
健太郎は少しずつ伊藤の口へトウモロコシを入れた。伊藤は聞きとれないぐらい低く、
「ありがとうございます」
と、いった。
「よくここまで逃げてこれたな」
「はい。みんなのおかげです。上等兵どのもよく生きてこれましたね。みんなで戦死したろうっていってました」
「そうか。そういってたか。運よかったからだべ。戦争って本当に運だもな」
「はい。私は運悪くて。間もなく死ぬでしょう」
健太郎は、伊藤は本当に間もなく死ぬだろうと思う。だが反対のことをいった。
「いや。弾の傷で死ぬのは三日以内で死ぬよ。あれから七日にもなってるべ。大丈夫助かるよ」

「そうですか。さっき、村松衛生兵どのも助かるといってくれました」
健太郎は見るにたえず、水筒の水を飲ませて去った。伊藤はぴくとも動かずに、
「ありがとうございます」
何度もいっていた。
その夜も雨が降った。木をわたして草をかけただけの小屋だったが、それでも朝まで眠り続けた。
朝霧の中を健太郎は村松と滝上と三人でトウモロコシをとりに崖をおりた。崖のすぐ下に道路があった。
二キロメートルほど、北へ行くと見わたすかぎりトウモロコシ畑だった。
「おい。あの部落に行って見るべ」
村松が先にたってどんどん進んだ。
近づいてみると、家が十軒ばかりあったらしいが、みなこわされて、土壁だけが立っている。くずれた土壁の横に大きな瓶があった。蓋をとってみると泥のようなものが入っていて、その上を蛆が無数にうごめいている。

「味噌だ。これぇ宝物だでぇよ」
松村は蛆を手ではらいのけて味噌をさらって口に入れた。さっそく三人で飯盒いっぱいにつめ、そのほかにトーモロコシを捨てて雑嚢にまでつめた。
赤城の山の近くまで帰ったとき、健太郎は向こうからやって来る一人の人を見た。
「おい、地方人だ」
「そうだ、たった一人で。女でねぇか」
「まさか、女一人で」
近づくと、よごれた男の服を着て髪を切って戦闘帽をかぶっていたが、四十歳ぐらいの日本人の女であることがすぐわかった。
女はリュックサック一つ重たそうに背負って、わき目もふらずに下を見たまま近づいて来た。村松が大声で呼びかけた。
「あのー、どこから来たの、どこへ行くの」
女は返事しないで通り過ぎた。健太郎が呼びかけた。
「ここに日本兵が五百人ぐらいいますよ。一緒に行動した方が——」

女は立ちどまって後をふり返った。表情一つ動かさなかった。健太郎はどこかで見たことがある人のような気がした。

「どうして一人になったんです。どこへ行くんです」

女はうるさそうに一言いった。

「勃利開拓団。みんなやられたよ」

「やられた？　地方人も敵に？」

健太郎は、開拓団や民間人が敵に襲撃されてこんなことになっていたのかとびっくりした。村松が近寄ってリュックサックの上から中をのぞいて、

「なに持ってるの」

といった。女は警戒の色を示した。

「トウモロコシだよ。あとはなにもないよ」

健太郎は、女が日本兵にまで警戒の色を示したのにとまどった。健太郎たちは中国全域で日本軍が敗れ、その全域の日本人が地獄の中を逃げまわっていることを知らなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co